モンペリエ大学の恩師達へのレクイエム

井　上　富　江

『序』

モンペリエ第三大学（ポールヴァレリー大学）と別府大学の教授および学生の交流が始まって既に22年を数えようとしている現在。紀要62号刊行にあたって私も原稿を書くようにということなので、改めてモンペリエ大学に初めて学んだ頃の教授たちや大学の雰囲気を伝えるのもこれからモンペリエ大学に交換教授として行かれる先生たちや学生たちにも有効かなと思い一文をしたためる事にした。

モンペリエ大学は言うまでもなくヨーロッパの数多い大学の中でもその歴史の長さとこれまで排出した輝かしい人材の豊かさで群をぬいていることは衆目も認めるところである。フランソワ

ラブレーは医師免許と博士号をこの大学で取得し、1239年以降の代々の教授陣の肖像画ギャラリーには彼の像もかかっている。彼のルネッサンス期における輝かしい活躍は文学者でなくとも知らない人はないであろう。ミシェル　ド　ノートルダム（ノストラダムスと言う方が分かりやすいかも？）もまたこの大学の医学部に学んだことは確かであり、博士号をとったと言われているし教授経験もあると言われている。がその証拠は残されていない。ペトラルカも又彼の父がダンテとも政治的に繋がりのある人物で教皇党白派に属したが黒派に破れ一家はアヴィニョンに居を移したクレマンス5世に従い1311年フランスのカルパントラに移転した。そのためにモンペリエ大学法学部（後にボローニャ大学でも学ぶ）で学び珠玉の詩編を書いた事は有名である。これらの先陣たちは遠い彼方にいるとしてもこの大学の法学部に学んで現在モンペリエ第三大学には彼の名前がつけられているポール　ヴァレリーがこの大学で学んだことは記憶に新しい。

私がここに留学することになったのは一重に恩師杉富士雄先生が共に親しく学会活動をしていたシャルル　カンプルー教授がいた事、卒論がポール　ヴァレリーの詩であった事、又フランス外務省主宰のフランス語教師のための再教育の場所が偶然にもモンペリエ大学であったということによる。モンペリエ大学には外国人にフランス語を教えるフランス語教師のためのコースが別にあったので日本のフランス語教師再教育には最適だったと思われる。他にはブザンソンにも同様のコースを設置してあったので我々以前にまた以後にも、そちらで研修を受けた先生たちも多い。卒論で取り組んだポール　ヴァレリーの作品の数々に詠われた原風景を見る事ができるという喜びは、何者にも代え難い。彼の作品の一節はいつも私の脳裏にあったから。

Ce toit tranquille où marchent des colombes
Entre les pins palpite, entre les tombes
Midi le juste y compose de feux
La mer, la mer, toujours recommencée !
O récompense après une pensée
Qu'un long regard sur le calme des dieux (Le Cimetière Marin)

ポール　ヴァレリーを育てた風土、その原点を遡って勉強してみたい。私の中にはそんな思いが

ふつふつと育っていたのである。

1）シャルル　カンプルー氏指導下での日々

モンペリエの後パリで総仕上げをして、研修は無事終了し、いよいよ留学の手続きに恩師より紹介していただいたシャルル　カンプルー氏に会いに研究室にお邪魔した。先生はいともにこやかに「これからここで学ぶのだね。」と言われるので「はい、初めてで何もわからないので、まずどのコースに登録するべきなのでしょうか？」とおそるおそる尋ねた。先生は「君は日本ではこちらの修士にあたる資格があるので修士課程なり博士課程なりどこでも選べるよ。」とまことに親切なお答えをいただいた。私が滞在できるのは翌年の４月までだったので、「博士課程に籍を置くには留学期間が短じか過ぎますので、修士課程で学ばせて下さい。」「本当は語学のコースでもいいのです。」事実モンペリエの先生たちのフランス語は、ほとんどの先生たちのしゃべるスピードが速い上に訛が強く理解できないことも多々あったから思わずこんな弱気な言葉もでたのである。補足すると日本の学士号はフランスでは３年目に取得でき、４年目には順調にいけば修士号、当時は Maîtrise、現在は Master1、Master2 と２段階になっている。後にわかったのだが、日本での私の恩師はフランスに初めて行く時に恩師が行く地方では皆がオック後を話すと信じていて、独学で話せるように特訓されたそうだ。まずアヴィニョオンに降りたのだが、駅に降り立つなりオック語をまくしたてたと言う。アヴィニヨンの人たちはどんなに驚いて口をあんぐりと開けて先生を見たことであろう。カンプルー先生はそのことを本当におかしそうに私に話して下さって「彼の教え子の君ならオック語はぺらぺらだろう。」と、おっしゃった。これも驚き桃ノ木で、なるほど恩師からオック語文学の数々は教えていただいたが、ついぞオック語会話も文法も教えていただいたことはなかったのである。教科書の後ろにそれらしいページはあったものの、そういう講義をする暇も時間もなかったのである。こんな誤解があって私にドクターコースを薦めたのだった。くわばら！くわばら！！！ドクターコースを選ばなくて本当に幸いであった。その理由は最初の講義に教室で待っていた時に判明した。留学生は私一人であった。つかつかと一番年かさであろうと思われる女性が私の前に立ち、「あなた何も知らないでこの講義を選んだのね。悪い事は言わないからおやめなさい。この先生は大学の中で一番厳しい方でこの講義は一番難解な講義なの。資格なんて絶対に取れないからさっさと別の講義に変えなさい。」と言ったのである。驚いたの、何のって、ビックリして空いた口が塞がらなかった。こんなことを言われようとは思いもよらず［資格を取る事が目的ではなく少なくとも講義を受ける事が大切なのです。日本の先生に紹介されて来たのですから］と勇気を振り絞って答えた。その方はそれ以上言う事なく引き下がったが、本当に驚いてしまった。講義が始まるや否やその方の言ったことは本当であった。先生は教壇に立つなり黒板に参考文献、読むべき資料のリストをずらずらと書き始めた。必死に学生達は書き写していく。挙げられた書物はざっと 30 数冊の名前があった。しかしそれは正しい数字ではなく一つが十数巻のシリーズであったり、３巻本であったりで、あわせると一体何冊になったのであろう？驚いてばかりいても始まらないので、まずはその本を手に入れなければ、と週に一度の指導教授との面接日に「読むべき本を貸して下さい」とお願いした。先生は快く［君は何語の資料が読めるかね。イタリア語、スペイン語、ラテン語、古プロヴァンス語、ギリシャ語、フランス語？］と畳み掛ける。「すみません、フランス語と英語でお願いします」目を白黒している私に「ではとにかくここらあたりから始めなさい。」と 5-6 冊出して下さったので、お借りする事にした。少なくとも修士課程に進む前に習得すべきことがそもそも習得されていないということは先生にも少し了解していただけたようであった。フランスでは学生は必要な資料は図書館でほとんど入手する事ができる。学校の図書館にないときは、国立図書館なり他大学の図書館から取り寄せて読むことになる。もちろんマニュスクリと呼ばれる美しい手

書きの写本はパリの国立図書館の写本室に行って実物を見せてもらうことになる。そういうシステムも知らず何も分からずに飛び込んだ私の向こう見ずな学生生活は言うまでもなく過酷なもので、今考えても信じられない選択であった。友達になった韓国人やタイ人の学生たちが取っている現代象徴詩の課程に聴講に行った時、「これなら議論に参加できるし、既に読んでしまった参考文献もたくさんあるな。これで単位を取得するのも、論文を書くのも楽だな。」と思ったものだ。彼女たちが読んでない作家もほとんど既に読んでいたので、「これはどんな本なの」と聞かれると説明してあげたりもした。ただ資格を取得する事が目的であれば、おそらくその方法をとったであろう。

先生の講義は「アルビ十字軍の歌」についての講義で南仏を襲ったシモン ド モンンフォールを総大将とする北仏諸侯と南仏諸侯との痛ましい戦いの記録を読破することであった。私の学生生活は大学で授業を受け宿題を提出し、論文指導を受け資料を読破するという悪戦苦闘の連続であった。授業はとても充実していて、先生の説明も熱を帯び興味深いものであった。たとえ理解できない文法事項があったにしても、内容が興味深かったのでこの講義を選んだことに後悔したことはなかった。講義を受ける事は、選んだ課程ではどれか一つの講義の単位を取得することが必須条件であったので、これは義務であったのだ。論文指導はまた別に研究室でやっていただいた。しかし私の事情が少し分かったので、それ以後の論文指導は先生のご自宅でということになった。最初に私に忠告した学生も含めて先生の講義についていくのは大変であった。時々に展開される古プロヴァンス語文法の解説は学生にとっても難解なもので理解不能なのは私だけではなかったようである。すくなくとも内容だけは理解したいと必死で辞書を引きまくりそれでも理解不能なので現代オック語文学を教えていた先生の義理の息子にあたるジャン－マリ　プチ先生に紹介していただき、その講義も合わせて出席させていただくことにした。この二人の先生との交流は本当に得難いもので、お蔭で南仏の歴史、言語、文化についてたくさんの資料を紹介していただき、生きた南仏文化を経験させていただくことにもなったのであった。ご自宅に伺い奥様のお茶や手料理をいただくこともあったので、私には本当に難解だが得難い指導の時間であった。後に無二の友人となるプチ先生の奥様、すなわち恩師の３番目の娘さんともこの時に知己をえたのであった。その頃私を悩ませていた気管支炎は本当にひどいもので南仏の乾燥した気候が私の気管をすっかり痛めてしまったのだった。一度ひどい熱をだしたことがあって奥様は「これはこの地方で飲まれる特効薬だからいやがらずに飲んで。」とわざわざ南仏の家伝薬を煎じて下さった。出された液体はお世辞にも美味しい代物ではなく、それは覚悟していたのだが、凄い味と匂いであった。死ぬかと思いながら残すのは失礼だと全部いただいたが、［これを飲んで眠れば嘘のように楽になるよ。」とベッドに休ませて下さった。一介の留学生にこのように親切に接して下さった先生やご家族の寛容さと親切には本当に感謝してもしきれないものであった。後で教えて下さったのだが、あの液体の正体はニンニク一束のスープで南仏では、特にこの地方では、風邪や熱がでると、どの家庭でもやるのだと他の友人たちからも聞かされた。そのスープの名前を言う時のいたずらっぽい友人たちの表情は今でも忘れられない。「どうだった？美味しかった？」と聞かれて思わず「それは本当に健康にいいものだったわ。」と bon と言う仏語を健康に良いと言う意味に使って答えたのだが、以来私が作った日本料理や抹茶を飲ませた時、それが彼ら、彼女たちにとても耐えられない味だった時には、友人たちはすかさずこの表現を使ってウインクしながら答えたものであった。

その特効薬を飲んでから先生たちと私の距離はぐっと縮まって先生ご自身の様々な経験をお茶の時間や食事の時間に話して下さったのである。後に思い起こしてもその度によくあんな経験をした方とお知り合いになって目の前でその経験を伺うことができたものだと、紹介して下さった

日本の恩師に心から感謝したものである。今しかできない経験だからとそれまで読んだこともない資料の読破に精力的に取り組んでいき指導の時には関連の資料や理解できなかったことを質問したりくわしく解説していただいたり、密な時間を過ごす事ができたのは先生の忍耐力と寛容さのお蔭である。しばしばこんなことも知らないのかと驚愕したことであろう。先生は徐々にご自分の戦争中での経験をポツリポツリとお話になり、驚くべきその経験を知ることになる。それはまさに映画にでてくるような場面の数々で私がこの地方の歴史と文化に興味を抱いたのかを改めて想いださせてくれるものでもあった。カンプルー氏は 1908 年生まれ、まさに戦争に翻弄された世代である。兵役についてほどなく捕虜となりドイツ軍の収容所送りとなった。ほとんどの戦争従軍者に取って、収容所送りというのは、たちまち死を連想させるものであったのだが、恩師に取って幸いなことにその収容所には恩師が従軍前に編纂していた刊行誌 Occitania の愛読者であったドイツ軍将校がいた。彼は恩師を心から尊敬していたので、氏が収容所内で吟遊詩人の講義やミストラルの講演会を開く事を大目に見てくれていた。こうして恩師は『キャンパス大学』と名付けた文化的な活動を精力的におこない、氏の親衛隊をつくることに成功し、度々彼らと協力して、脱走を試みることになるのである。脱走を試みては失敗し、又企てるという繰り返しが何度も行われ、少しずつその方法も本格的なものになったそうだ。収容所から脱走できたとしてもドイツ国境を超えなければフランスに帰れない。こうして恩師は偽造パスポートの制作に取りかかった。元来器用な方で何の苦もなく偽造パスポートは完成し、「もちろんドイツ人将校の見て見ない振りをして見逃してくれたことも幸運であった」と語ってくれた。映画に出て来る通りトンネルを堀り進め、出口はできるだけ遠くに出られるように工夫したそうである。「問題は靴だったのだよ。」「いくらトンネルから出られたとしてもそこから遠くフランスまで歩かなければ国には帰れないのだからね。」どうやってトンネルから出て、どのようなルートを経てフランスまで歩いたのかについては、多くは語らなかったが、想像を絶する経験をなさったことであろう。こうして脱出に成功し、フランスに帰って来た恩師は直ちにレジスタンス活動に身を投じることになる。私が映画の中で見たことを恩師は身をもって経験したのであった。このような得難い経験をした持ち主に出会えたこと、その方の近くで自身の経験を話して頂く機会を得たことは、私にとって本当に幸運だったと言わなければならない。

不思議なことに恩師は中世史課程の指導も同時になさっていて、登録の時によく資料を読んでみると史学修士号も取る事が可能だったのである。もちろん論文を提出すればだが。その場合は必ず取得しなければならない授業単位はなかった。私が選んだものよりハードルは低かったのである。

2) ジャン－マリ　プチ氏の講義

もう一人の現代オック語オック文学のジャン－マリ　プチ先生の授業では、学生達はとてもいきいきと受講していた。先生の読むオック語はまるで落語ジュゲムジュゲムのようにおかしなリズムでまくしたてられるので学生達は大笑いで、聞いただけでは意味不明な私まで可笑しくなる楽しいものであった。カンプルー先生の授業は難しいということは充分理解していたので、私がたどたどしくオック後を発音しても笑って何度も直して下さった。学生たちのほとんどはおじいさんやおばあさんの世代がオック後を話していて、彼らも日常生活の中で聞いていたので、それほど理解不可能という代物ではなかったこともこの授業の雰囲気に余裕があると感じた理由であろう。カンプルー氏の講義のように、ラテン語文法の知識を要求され、更に難解な文法を知る必要もないこの講義は楽しく学べる愉快な講義であったのだ。私に取っては聞いて分かる代物ではなくこの講義も文法を知って発音の基礎を知らなければならないので、大変ではあったが、発音の規則はそれほど難解ではないし、文法も聞きながら少しずつやれば、文を理解できるので、何

とかついて行ける講義であった。プチ先生はオック語方言にも地方差があり、特定の地方ではどのような特徴を有しているかを克明に調査し、博士論文に書かれた方なので、驚く程耳が良くて、こまかな発音の差を瞬時に聞き分けることが可能であった。ただでさえ難解なのに、地方差があり、オック語と一言で片付けるわけにはいかないのだということが理解できた。日本の恩師がしゃべったのはオック語のうちプロヴァンサルと呼ばれる地域のオック語でミストラルを理解するためには大切なものだということも含めて、ボルドー地方でのオック語、ガスコンもモンペリエ周辺で話されるオック語、ラングドシアンもそれぞれ違うということも理解できた時、つくづく私が現代オック語を選んでなくて返って幸いだったかも知れないと思ったものである。それぞれの地方の方々は自分たちのオック語が正当なものだと思っているので留学生たちがどんなに迷惑に思っているかなど考えたこともなかったであろう。プチ先生はラジオ番組で地方の民話を語って人気を博していた。声が良い上にオック語のリズミカルな語りが先生にピッタリであったので聞くのは本当に楽しいものだった。後に冊子の形で印刷されたのでその民話の数々を翻訳し、プチ先生に吹き込んで頂いて、富岳書房から［ラングドック地方の民話］として出版した。プチ先生は世俗の司祭さんでもあり、結婚なさっていただが、教会のミサも結婚式もあげることが可能であった。こうして私は地方の結婚式に参列することもできたのである。教会のミサは毎週欠かさず参列することにもなった。もちろん改宗など薦められたことはなく私は仏教徒であり、神道であることは認めてくれていた。とても寛容な方なので外国人が正しい仏語をしゃべらなくても間違って当たり前だといつもおっしゃっていたので、とても有難い事だと感謝していた。奥様が元リセの地理の先生で生徒の指導も慣れていらっしゃったのも幸いであった。正しい言い回しをきちんと教えて下さるのはこの奥様の方であった。私たち日本人にとって仏語はいつまでたっても着物を 20 枚も来た上から痒い所を掻くようなもので、ぴったりの言い回しが即座に見つけられる事は至難の業であった。図らずもこうして二人の恩師やその家族のかた達と過ごした日々がモンペリエ大学との交流協定に発展するなど、当時は考えたこともなかった。留学期間はあっという間に終了し、私の勉強も中途半端なままで終了してしまった。いつか本格的にドクターに登録し、博士号を取る日がすぐに来るであろうと、当時は思っていたのだが、それも思うようにいかず、落胆する私に先生たちは夏休みに来て続きをやればいいよ。とおっしゃって下さり、それから毎年のように夏休みをパリの国立図書館で写本を少しずつ出してもらい、（当時はまだ写本そのものを見せて頂く事ができたのである。現在はデジタルでしか見られないのだが）残りの休暇は先生の山の別荘や友人達の家で過ごし、いろいろ教えて頂く日々を過ごしたのである。こういった交流の中でオック語の作家であり医師でもあったマックス　ルケット氏と知り合うことになり、オック語は中世のトゥルバドゥールの時代だけではなく現在もなお文学用語であると改めて認識したのである。氏の素晴らしい作品の数々はその後の私の学会活動に大きなインパクトを与えた。

『結び』

学術刊行誌 Les Langues Romanes 53 号は恩師カンプルー氏への追悼号となったし、モンペリエ第三大学にはカンプルー（Camproux）氏の名前がつけられた部屋もある。昨年残念なことにプチ先生も病死してしまった。プチ先生の尽力で交流協定が結ばれ、当時のミシェル　ヴェイユ学長共々調印のために先生ご夫妻を日本の自宅にお招きできたのがせめてもの恩返しになった。先生達にしていただいた何十分の一も恩返しできないうちにお二人共亡くなられたことは本当に残念なことであった。モンペリエでの留学の日々は私にとって何者にも代え難い得難い宝物であった。もしカンプルー氏の難解な授業から脱落し、より簡単な講義を選ぶという方法をとっていたらお二人との緊密なお付き合いは生まれなかったであろう。家族ぐるみでお付き合いしていたので、モンペリエ大学の学長、ミシェル　ヴェイユ氏とジャン－マリ　プチ御夫妻を自宅に

招くこともできた。そうでなければ、そんなことは恐れ多くてできなかったことであろう。交流協定によってモンペリエ第三大学の沢山の先生達が別府大学に来られ素晴らしい講義をにして下さった。どの先生の講義も通訳する私にとっては新鮮で自分自身の勉強にもなった。感謝に堪えない。ジャン－マリ　プチ先生退職後交流協定を進める仲介者の労を取って下さり、学生たちの面倒をきめ細かく見て下さったジョジアンヌ　マス先生、ジャン－マルク　サラル先生にはどのように感謝を伝えればいいのか、感謝しても感謝しきれない。現在もなお交流が続いているということは本当にありがたいことである。